太宰治の大宮

わがまち Sai 発（はっけん）

大人とは、
裏切られた青年の姿である。
―「津軽」

太宰治ほど、自身のエピソードに富んで、今でも多くの熱心な読者の心をつかんでいる作家は少ないのではないでしょうか。

既に古典のイメージのある太宰治ですが、2009年が生誕100年にあたります。三鷹市や山梨県では記念した展覧会が開催され、五所川原市と三鷹市では太宰治検定が実施されました。

本屋の店頭でも、人気漫画風イラストや、人気タレントの写真を表紙に使った太宰の文庫本が、最新のベストセラーと同じようにならんでいます。

太宰治というと、「斜陽」「桜桃」といった作品がまず浮かび、陰鬱で退廃的なイメージを持つ方も多いのではないでしょうか。太宰自身が繰り返した心中未遂が小説と結びつけられてしまっているのかも知れません。

中学校2年生の国語の教科書に採用されている「走れメロス」は、信頼と友情の美しさを描いているといわれますが、文学史の参考書等では、滅びの美学の代表作家として紹介されることが多いようです。

そんな太宰が愛人の山崎富栄を伴って大宮に来たのは、昭和23年4月29日でした。「人間失格」を完成させるために、古田晃（筑摩書房創設者）と宇治田積（元大宮町長、さいたま市名誉市民）の計らいで、現在の大宮区役所近くにあった小野沢さん宅に滞在して、富栄にかしずかれて執筆にあたりました。

「埼玉文学散歩」のなかで小野沢さんは「外見からは寂しいまでに静かな生活で、どこにも明るい影はみられなかった」と語っています。仕事場は8畳と3畳の2部屋で、ほとんど閉じこもったまま1日5枚の原稿を書いていたそうですが、銭湯松の湯（跡地が現在の蓮見病院）に出た時などには氷川参道にあった闇市（現在の平成広場）に立ち寄ったりしています。

大宮での太宰は、当時はなかなか食することができなかったご馳走を食べ、入手が難しかったウイスキーを飲みながら、来訪者に邪魔されることなく執筆を進めました。

2週間後の5月12日、太宰は代表作「人間失格」を、小野沢さんが所有していた大門町の仮寓で書き上げました。「人間失格」は、主人公の3通の手記を中心に構成されていますが、第3の手記の後半部分とあとがきを大宮で執筆したのです。

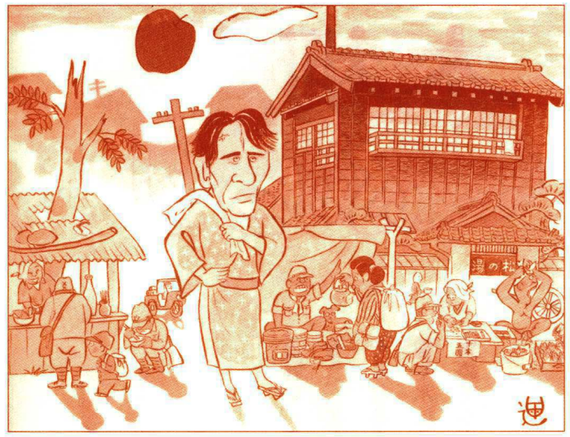
大宮を離れる時に太宰は、「『グット・バイ』の続きはぜひここで書きたいから、部屋をあけておいて下さいね」と言い置いたそうです。

1ヶ月後の6月12日の夕方、再び小野沢さん宅を訪れた太宰は「『グット・バイ』がちっとも書けないでね……」と洩らしたそうです。「埼玉文学散歩」のなかで小野沢さんは「ほんとうに寂しそうな人でしたが、この時は格別で、今に忘れることができません」と印象を語っています。

この翌日、太宰は富栄と玉川上水（三鷹市）で入水心中をしています。現在でも、遺体が発見された日を命日（奇しくも誕生日でもあります）として三鷹市の禅林寺では桜桃忌が営まれています。

桜桃忌は有名ですが、太宰が自死する前の日に、大宮を訪れていることはあまり知られていないようです。そのとき太宰の目には、大宮の町並みがどのように映っていたのでしょうか。

太宰の小説は永遠の青春小説として愛されていますが、代表作の一つ「人間失格」がさいたま市で完成したこと、太宰が大宮の地を気に入っていたことを聞くと、その独自な文学世界とあまりに劇的な人生にも親しみが沸いてくるのではないでしょうか。（引用は原文ママ）



「漫画でみる大宮100年」（北沢楽天顕彰会　1985年）より
漫画家の勝又進による「太宰治、大宮で『人間失格』執筆」。
大宮での太宰を、エピソードを散りばめて描いています。

★大宮の太宰を知る本

◆**埼玉文学散歩**　榎本了壱著　松山文学散歩友の会　1964年

◆**埼玉の文学めぐり**　関田史郎著　富士出版　1972年

◆**沙和宋一と太宰治**　榊弘子著　さきたま出版会　2005年

著者の榊さんは、太宰と同じ青森市の出身。やはり青森市出身で旧大宮市に在んでいた作家の沙和宋一らと、タウン誌「おおみや」の編集に長く携わり、地域文化の振興に貢献した。

◆**わが師太宰治に捧ぐ**　桂英澄著　清流社　2009年

著者の桂英澄は、太宰最後の愛弟子で直木賞候補作家。浦和区に住み埼玉県の文壇の発展にも寄与した。桜桃忌の世話人会代表もつとめていた。

★ほかにもこんな本

◆**回想の太宰治**　津島美知子著　人文書院　1981年

◆**小説太宰治**　檀一雄著　檀一雄全集第7巻（新潮社　1977年）所収

◆**ピカレスク～太宰治伝**　猪瀬直樹著　小学館　2000年

◆**恋の蛍　山崎富栄と太宰治**　松本侑子著　光文社　2009年

◆**直筆で読む「人間失格」**　集英社　2008年

「人間失格」の直筆原稿を、書き損じや書き加えまでも写真版で完全収録している。

◆**走っけろメロス**　鎌田紳爾翻訳　未知谷　2009年

バリトン歌手でもある鎌田さんが「走れメロス」を津軽語に翻訳。自ら津軽語で朗読したCDが付属されている。

ンダスゲマイネ。太宰治蒼春篇　楠木あると著　講談社モーニングKC　2009年

兄の死、最初の結婚、鎌倉心中事件など、津島修治の誕生から25歳までを描いたコミック。「んだすげまいね」は津軽語で「だから駄目」の意味。「卑俗性」を意味するドイツ語に由来する「ダス・ゲマイネ」という太宰の作品もある。

本だけじゃない！太宰治

★映画

根岸吉太郎監督が「ヴィヨンの妻　桜桃とタンポポ」で、モントリオール映画祭で最優秀監督賞を受賞したというニュースは記憶に新しいところです。劇場でご覧になった方もいると思いますが、この映画は太宰治の「ヴィヨンの妻」をベースに「思い出」「桜桃」「姥捨」「灯篭」「きりぎりす」「二十世紀旗手」などの太宰治の短編のエッセンスを取り込んで映像化した作品です。

生誕100年にあたる2009年はこのほかにも、芥川賞作家の川上未映子がヒロインを演じて話題の「パンドラの匣」（監督・冨永昌敬）や、「斜陽」（監督・秋原正俊）といった小説が次々と映画化されました。代表作である「人間失格」（監督・荒戸源次郎）も映画化されて2010年初春の全国ロードショーが決定しています。

ほか、主な映画化作品：「タイトル」（原作・監督・公開）

「富嶽百景　遥かなる場所」（富嶽景・秋原正俊・2006年）

◆**「奇巌城の冒険」**（走れメロス・谷口千吉・1966年）

「真白き富士の嶺」（葉桜と魔笛・森永健次郎・1963年）

「看護婦の日記」（パンドラの匣・吉村廉・1947年）

「四つの結婚」（佳日・青柳信雄・1944）

★こんな曲があります

「饗応夫人～太宰治作「饗応夫人」のための音楽」田村文生作曲

1994年全日本吹奏楽コンクール課題曲。冒頭の木管楽器の高音が印象的な、高度な演奏技術が求められる曲。作曲の田村さんは川越市出身で、この曲は太宰作品に描かれた矛盾した人間性を表現したといわれている。

「今宵、月が見えずとも」新藤晴一作詞、岡野昭仁作曲

紅白歌合戦にも7回出場したロックバンド、ポルノグラフティの27枚目のシングル。2008年12月に発売され日本レコード協会のゴールドディスクに認定されている。1番の歌詞にでてくる「太宰」は太宰治のこと。

「メロスの道」秋元康作詞、太田美知彦作曲、市川裕一編曲

秋葉原の専用劇場でほぼ毎日公演を行っている国民的アイドルグループ、AKB48（チームK）の4作目のステージとして平成20年5月から翌年4月まで公演された「最終ベルが鳴る」で使用された楽曲。「走れメロス」をモチーフに作られている。

「メロスのように-LONELY WAY-」秋元康作詞、中崎英也作曲

昭和60年から全38話がテレビ放送されたサンライズ製作のロボットアニメーション「蒼き流星SPレイズナー」の主題歌。やはり「走れメロス」をモチーフに作られている。番組終了後も堀江由衣などの声優がカバー録音している。

◆印の資料はさいたま市図書館で所蔵しています。